すみだと北斎

墨田区は、隅田川をはじめ多くの川に接しており、
隅田川の花火、墨堤の桜、相撲、史跡や老舗など、
江戸時代から引き継がれる文化が今もなお息づく下町情緒豊かなまちです。
こうした“すみだ”からは、様々な分野で活躍した偉人が多数輩出しています。
その中のひとりで、世界的に高く評価されている浮世絵師・葛飾北斎（1760～1849年）は
本所割下水界隈（現在の亀沢付近）に生まれ、
90年に及ぶ生涯のほとんどを“すみだ”で過ごし、
数多くの作品を描いたのです。

“すみだ”の位置

墨田区は、都心にも近い東京の東部に位置し、
隅田川東岸に隣接しています。
下町情緒豊かな町並みと、
世界が注目する東京スカイツリー®、
伝統とモダンが融合するまちです。

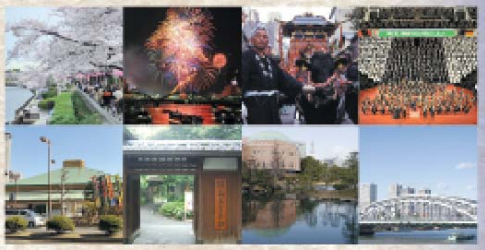
★印は、このリーフレットで紹介している北斎とかかわりのある地点です。

壱…本所割下水
弐…両国橋
参…回向院
四…関屋の里
五…牛嶋神社
六…榛馬場

“すみだ”の魅力

観る

満開の桜が隅田川を彩る春、2万発の大輪の花火が夜空を飾る夏、町中が祭の熱気に満たされる秋、5000人の歓喜の歌声が響く冬、そして“すみだ”の新たな注目スポット東京スカイツリー®。四季を通じて見どころ満載の“すみだ”です。



味わう

相撲のまちを象徴するちゃんこ、多様な文化が育んだバラエティ豊かな和菓子、寿司、どじょう、鳥鍋、蕎麦など、多くの老舗が伝統の味を伝える和食。“すみだ”は歴史を感じる食の宝庫です。

出会う

伝統に培われた匠の技を受け継ぐ職人。そして職人が作り出す伝統工芸品。“すみだ”では、粋を伝える様々な逸品に出会えます。

画像提供：東武鉄道株式会社・東武タワースカイツリー株式会社

すみだ 北斎美術館

墨田区では、郷土の偉大な芸術家である葛飾北斎を区民の誇りとして永く顕彰するとともに、本区の特色ある文化として国内外に紹介する、北斎に関する総合的な美術館「すみだ 北斎美術館」の開設準備を進めています。この美術館では、北斎及び門人の作品を新しい視点で展示し紹介するほか、“すみだ”と北斎とのかかわりなどについて皆様にわかりやすく伝えていきます。

建設地：墨田区亀沢2丁目7番

すみだ北斎美術館

墨田区へのアクセス

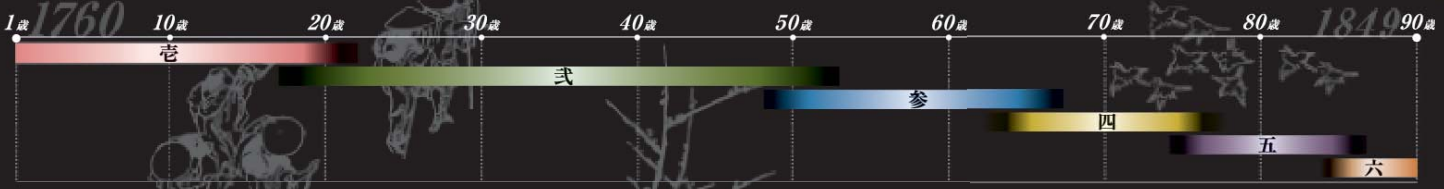
東京駅 — JR山手線 — 秋葉原駅 — JR総武線 — 両国駅 — 錦糸町駅
東京駅から約10分

上野駅 — 東京メトロ銀座線 — 浅草駅 — 都営地下鉄浅草線 — 押上駅
上野駅から約15分

「すみだと北斎」平成23(2011)年8月発行
発行：墨田区　電話：03-5608-1111(代表)
協力：墨田区文化振興財団北斎担当
表紙：「富嶽三十六景　山下白雨」(部分)

“すみだ”に生きた北斎

93回にも及ぶ転居を重ねながらも、生涯のほとんどを“すみだ”で暮らした北斎。
ここでは、北斎が残した“すみだ”にまつわる数多くのエピソードの中から、
年代を追って6点を紹介します。



壱 北斎生誕の地

本所割下水

「忠臣蔵討入」

関東大震災(1923年)以前の本所割下水

北斎は宝暦10(1760)年、本所割下水界隈(現在の亀沢付近)に生まれました。割下水という名は、通りの中央に堀割があったことにちなみます。北斎は幼少の頃に幕府御用鏡師、中島伊勢の養子になったと伝えられており、中島家は本所割下水に近い吉良上野介の屋敷跡にありました。吉良邸は主君の仇討をする赤穂浪士事件の舞台となった場所で、その話は浄瑠璃などに取り入れられ「仮名手本忠臣蔵」として知られています。

弐 隅田川の賑わい

両国橋

両国の花火は享保18(1733)年、疫病の退散を祈願し、亡くなった人々の霊を弔うために、川開きの日に打上げられたのが始まりといわれています。江戸が東京と名を変えても夏の風物詩として、現代まで受け継がれています。当初、花火は20発程だったといわれていますが、納涼船や夕涼みのために人々が押し寄せ、大変な人出だったようです。北斎もまた、江戸一番の賑わいを見せた両国橋界隈をはじめ、隅田川沿いの風景をよく描きました。

「新板浮絵両国橋夕涼花火見物之図」

現在の隅田川の花火

参 ホクサイ・スケッチ・ブック――北斎漫画

回向院

「漫画」とは現在のコミックの意味ではなく、北斎が気の向くままに漫然と描いた画集のことです。欧米では“ホクサイ・スケッチ・ブック”という名で親しまれ、その優れたデッサン力はヨーロッパの印象派の芸術家に影響を与えました。庶民の風俗や空想上の動物など、様々なものが描かれています。なかには相撲の力士も描かれていますが、区内には江戸後期に勧進相撲の定場所となった回向院や、現在大相撲が開催されている国技館があります。

『伝神開手 北斎漫画』11編より

現在の回向院

四 世界に誇る北斎の代表作―冨嶽三十六景

関屋の里

天保2(1831)年前後に、北斎の代表作「冨嶽三十六景」が生まれます。大胆な構図で江戸の人々を魅了し、浮世絵における風景画のジャンルの確立という功績を残しました。国外でも大きな反響があり、中でも「神奈川沖浪裏」がドビュッシーの交響詩「海」にインスピレーションを与えたエピソードは有名です。北斎はさまざまな場所から富士をとらえましたが、「隅田川関屋の里」など墨田区内からのぞむ富士を描いた作品も残しています。

「冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏」

「冨嶽三十六景　隅田川関屋の里」

五 幻の大作

牛嶋神社

「須佐之男命厄神退治之図」(板額)

北斎は、弘化2(1845)年頃、牛嶋神社(現在の向島1丁目)の近くに住んでいたといわれ、大絵額「須佐之男命厄神退治之図」を描き、奉納しています。この絵額は1923年の関東大震災で焼失しましたが、縦1.2m余、横2.8mに及ぶ大作で、北斎の作画への情熱が晩年になっても衰えていなかったことを物語っています。なお、現在、社殿に原寸大の復元パネルが飾られています。

現在の牛嶋神社

六 北斎の晩年の棲家

榛馬場

一生で93回の転居を重ねた北斎は、晩年に娘のお栄と区内にある本所亀沢町の榛馬場(現在の両国4丁目付近)に住んでいたことがあります。その住まいの親子の様子を、弟子が絵に残しています。北斎は炬燵の布団をかぶって絵を描いていますが、室内は散らかったままで家財道具はほとんどなく、質素な生活ぶりがうかがえます。嘉永2(1849)年、北斎は「あと五年生きれば真の絵描きになれただろう」と言い残して90歳の生涯を閉じたといわれています。

露木為一画「北斎仮宅之図」(国立国会図書館蔵)

現在の榛馬場(榛稲荷神社)